復活節第３主日礼拝説教「神の羊の群れとなる」予稿

日本基督教団石神井教会　2026 年 4 月 19 日

【旧約聖書日課】エゼキエル書　34章7～15節

7それゆえ、牧者たちよ。主の言葉を聞け。8わたしは生きている、と主なる神は言われる。
まことに、わたしの群れは略奪にさらされ、わたしの群れは牧者がいないため、あらゆる
野の獣の餌食になろうとしているのに、わたしの牧者たちは群れを探しもしない。牧者は
群れを養わず、自分自身を養っている。9それゆえ牧者たちよ、主の言葉を聞け。10主なる
神はこう言われる。見よ、わたしは牧者たちに立ち向かう。わたしの群れを彼らの手から
求め、彼らに群れを飼うことをやめさせる。牧者たちが、自分自身を養うことはもはやで
きない。わたしが彼らの口から群れを救い出し、彼らの餌食にはさせないからだ。

11まことに、主なる神はこう言われる。見よ、わたしは自ら自分の群れを探し出し、彼
らの世話をする。12牧者が、自分の羊がちりぢりになっているときに、その群れを探すよ
うに、わたしは自分の羊を探す。わたしは雲と密雲の日に散らされた群れを、すべての場
所から救い出す。13わたしは彼らを諸国の民の中から連れ出し、諸国から集めて彼らの土
地に導く。わたしはイスラエルの山々、谷間、また居住地で彼らを養う。14わたしは良い
牧草地で彼らを養う。イスラエルの高い山々は彼らの牧場となる。彼らはイスラエルの
山々で憩い、良い牧場と肥沃な牧草地で養われる。15わたしがわたしの群れを養い、憩わ
せる、と主なる神は言われる。

【使徒書日課】ペトロの手紙一　5章1～11節

1さて、わたしは長老の一人として、また、キリストの受難の証人、やがて現れる栄光
にあずかる者として、あなたがたのうちの長老たちに勧めます。2あなたがたにゆだねら
れている、神の羊の群れを牧しなさい。強制されてではなく、神に従って、自ら進んで世
話をしなさい。卑しい利得のためにではなく献身的にしなさい。3ゆだねられている人々
に対して、権威を振り回してもいけません。むしろ、群れの模範になりなさい。4そうす
れば、大牧者がお見えになるとき、あなたがたはしぼむことのない栄冠を受けることに
なります。

5同じように、若い人たち、長老に従いなさい。皆互いに謙遜を身に着けなさい。なぜ
なら、

「神は、高慢な者を敵とし、
謙遜な者には恵みをお与えになる」

からです。

6だから、神の力強い御手の下で自分を低くしなさい。そうすれば、かの時には高めて
いただけます。7思い煩いは、何もかも神にお任せしなさい。神が、あなたがたのことを
心にかけていてくださるからです。

8身を慎んで目を覚ましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたける獅子の
ように、だれかを食い尽くそうと探し回っています。9信仰にしっかり踏みとどまって、
悪魔に抵抗しなさい。あなたがたと信仰を同じくする兄弟たちも、この世で同じ苦しみに
遭っているのです。それはあなたがたも知っているとおりです。10しかし、あらゆる恵み
の源である神、すなわち、キリスト・イエスを通してあなたがたを永遠の栄光へ招いてく
ださった神御自身が、しばらくの間苦しんだあなたがたを完全な者とし、強め、力づけ、
揺らぐことがないようにしてくださいます。11力が世々限りなく神にありますように、ア
ーメン。

【福音書日課】ヨハネによる福音書　10章7～18節

7イエスはまた言われた。「はっきり言っておく。わたしは羊の門である。8わたしより
前に来た者は皆、盗人であり、強盗である。しかし、羊は彼らの言うことを聞かなかった。
9わたしは門である。わたしを通って入る者は救われる。その人は、門を出入りして牧草
を見つける。10盗人が来るのは、盗んだり、屠ったり、滅ぼしたりするためにほかならな
い。わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受けるためである。11わたし
は良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。12羊飼いでなく、自分の羊を
持たない雇い人は、狼が来るのを見ると、羊を置き去りにして逃げる。――狼は羊を奪い、
また追い散らす。――13彼は雇い人で、羊のことを心にかけていないからである。14わたし
は良い羊飼いである。わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている。15それ
は、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである。わたしは羊の
ために命を捨てる。16わたしには、この囲いに入っていないほかの羊もいる。その羊をも
導かなければならない。その羊もわたしの声を聞き分ける。こうして、羊は一人の羊飼い
に導かれ、一つの群れになる。17わたしは命を、再び受けるために、捨てる。それゆえ、
父はわたしを愛してくださる。18だれもわたしから命を奪い取ることはできない。わたし
は自分でそれを捨てる。わたしは命を捨てることもでき、それを再び受けることもできる。
これは、わたしが父から受けた掟である。」

主イエスは「良い羊飼い」【こども説教のために】

ご復活の主イエスが現れてくださったとき、弟子たちが真っ先に思い出したことがありました。主イエスが「**わたしは良い羊飼いである**」とおっしゃられていたことです。「**良い羊飼いは羊のために命を捨てる**」、「**わたしは羊のために命を捨てる**」とおっしゃられていたことです。そして、「**わたしは命を、再び受けるために、捨てる**」とおっしゃられていたことです。

主イエスが十字架で死なれて、けれども三日目にご復活くださったのは、「**羊が命を受けるため**」だった。羊を狙う盗人や強盗、狼から救い出して、豊かな命を生きることができるようにしてくださるために、主イエスは、命をかけてくださり、死んでくださり、そしてご復活くださった。そのように弟子たちは、ご復活の主イエスが現れてくださったとき、自分たちの命が救われ、自分たちの人生が取り戻されたことを知らされたのです。

ご復活の主イエスが弟子たちの集まる中に現れてくださったのは、三度だったとも、四十日間だったとも言われます。弟子たちは、あるときからご復活の主イエスを見なくなりました。いいえ、見る必要が無くなったのでしょう。ご復活の主イエスが**良い羊飼い**として自分たち「羊の群れ」を守り、導いてくださっていることが、分かるようになったからです。ご復活の主イエスを見なくても、その御声の響きを聴きとることができるようになったのです。御声の響きを聴きとる弟子たちの教会の集まるところで、ご復活の主イエスは、まだ主を見ていない人のためにこそ現れてくださるのです。

「群れを牧しなさい」

日曜日の朝、皆さんが教会へと集められて来られるのをお迎えできるのは、何と幸いなことかと思います。皆さんをお迎えするために、できるだけ玄関ホールに立たせていただくようにしてきました。

もちろん、日曜日の朝、皆さんが何よりも礼拝にあずかられるためにおいでであることは、承知しています。中には、礼拝前に誰かと挨拶を交わすことを好まない方もあるでしょう。人の言葉を聞くより先に、まっすぐ神の御前に進み出て、心を開き、霊的な備えを始めていただくのは、良いことです。そのことを大切にしていらっしゃる方もあるでしょう。あるいは、他人には言えない重い問題を抱えてきて、ただ神の御前に心を開いてお聞きいただくしかない、との思いで礼拝にお出でになられるような方も、あるかもしれません。そうであれば、神の御前に進み出る礼拝が始まろうとするときに、自分の都合で用事を始めたり、連絡を取ろうとしたりすることは、極力、避けるべきだと思います。挨拶さえ煩わしく思われる方があるならば、玄関に立つ者と挨拶せずに素通りして礼拝堂に向かい、神の御前に進み出ていただいてよいのです。

それでも、わたしは、皆さんをお迎えするために、できるだけ立ち続けるつもりです。「牧師」、つまり「牧者・羊飼い」という呼称を与えられた務めに就かせていただいている者は、真の「**大牧者**」であり「良い羊飼い」であられる主イエスに倣う者であるべきだからです。

「**わたしは羊の門である**」と言われる主イエスは、「**門番は羊飼いには門を開き、羊はその声を聞き分ける**」（ヨハネ 10:3）ともおっしゃられていました。主イエスがご自分の門を開いてくださるとき、羊飼いは、羊たちがその門を出入りできるように声をかけ、導くのです。もちろん、教会にあって本当の意味での羊飼いは、主イエスに他なりません。「牧師」は、「羊飼い」を名乗っていても、「良い羊飼い」の下で仕える「羊飼い見習い」に過ぎないでしょう。それでも、「見習い」は「見習い」なりに、同じことをさせていただくのです。

主イエスが皆さんを、ご自分の教会の中へと導き入れてくださるときに、どんな言葉を用いて、どのような御声をお聞かせくださっているのかと想像しながら、わたしは皆さんを迎えて一言の挨拶をさせていただくのです。あるいは、主イエスが皆さんを、ご自分の教会からこの世へと導き出してくださるときに、どんな言葉を用いて、どのような御声をお聞かせくださっているのかと想像しながら、わたしは皆さんを送り出す一言の挨拶をさせていただくのです。そこに、「**良い羊飼い**」として導いてくださる主イエスがおいでくださっていると信じているのです。

「一つの群れになる」

もちろん、牧師の個人的な思いが重要なのではありません。それは、取るに足りないことです。わたしたちにとって大切なことは、「わたしは良い羊飼いである」とおっしゃってくださる主イエスの思いであり、主イエスを弟子たちの間にお遣わしくださった御父である神の御心です。

牧師が説教を語っているときにも、ただひたすら主イエスへと思いを向けられ、御父の御心に触れようと、心を御前に注ぎ出されている方がいらっしゃるでしょう。それは、貴いことです。もちろん、牧師は、説教を通して皆さんが主イエスへと思いを向け、神の御心に触れていただきたいと願って、準備をし、語りもしています。そのために少しでも役に立つならばと、「説教予稿」をお配りしたりもしています。けれども、究極、牧師の説教は忘れられてよいのです。説教そのものが大切なのではなく、わたしたち皆が主イエスへと思いを向け、神の御心に触れるようになることが大切だからです。

ただお一人、主イエスの御声を聞き分けるようになること。主イエスの御声を通して神の言葉を聞き分けるようになること。わたしたちは、何よりも、そのことを願っています。

そうであればこそ、わたしたちは、主イエスがどの「**羊**」も独りのままにしてはおかれない、ということをわきまえるべきなのでしょう。主イエスが「**良い羊飼い**」として導かれるのは、「**羊**」たちが「**一つの群れになる**」ためです。預言者も告げるのです、神がご自分の「**羊**」を「**自ら…探し出し、彼らの世話をする**」と言われるのは、「**羊がちりぢりになっている**」ままであってはならないからであり、「**略奪にさらされ**」、「**野の獣の餌食になろうとしている**」羊を集めて「群れ」として「**養い、憩わせる**」ためだ、と。

世界で起こっていることに、わたしたちの国の中で起こっていることに、わたしたちの周囲や家族の中で起こっていることに、わたしたちは戸惑わされています。世界が、この国の社会が、わたしたちの周囲や家族が、壊れてしまっているのではないかと思わされない日はないでしょう。そのような陰鬱な思いを避けて、刹那的な楽しみに逃げ出したくなることも、少なくないかもしれません。壊れてしまったこの世からの逃れ場として教会を考える方もあるかもしれません。しかし、教会さえ壊れてしまっていると考える者は、もはや、一人になることで安全安心を得ようとするかもしれません。

それでも、主イエスは、わたしたちを「一つの群れ」として導くとおっしゃられるのです。バラバラではなく、散り散りではなく、「一つの群れ」として命を回復し、人生を取り戻す道を、お示しなのです。そのために「命を捨てる」ことがあっても、そこに御父の御心があるとお示しくださったお方が、弟子たちの間に、わたしたちの間に復活して現れてくださるお方なのです。